

『風景によせて 2020-2021』 レポート



1. ご挨拶

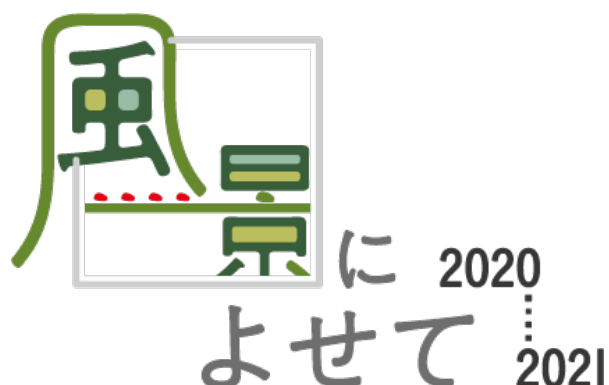
ソノチでは、2年間取り組んできた「風景」へのアプローチの一環で、初の野外上演となる『風景によせて 2020-2021』を発表しました。一年間に渡るプロジェクトは、コロナ禍の2020年4月より開始しました。同年10月～11月には掛川市の原泉地区での滞在制作を通して制作したパフォーマンスの上演と展示。2021年2月には、京都府の京丹波町質美での上演を行いました。

この過程は、多くの方のご協力や応援があったからこそ実現したものです。皆さまに心からの感謝を申し上げます。

これからの作品創作は、この混乱が収束したら・・・、ではなく、新しい上演形態や鑑賞形態のもと、プロセスのアーカイブ等も含めた「これからのクリエイション」に進化するのだと思います。皆さんと見つめる、このプロジェクトの先に、何が広がるでしょうか。まだ見ぬ風景によせて。

ソノチ 中谷和代

2. プロジェクト概要



<静岡>

『風景によせて 2020』

上演日 | 2020年10月17日(土)・10月18日(日)

11月14日(土)・11月15日(日)

上演時間(各15分間) |

11:55～「さんさん ぼわぼわ ぐう」

12:55～「ととつと ちゃかしゃか ふう」

15:00～「ぼそぼそ ポソーサリィ」

15:30～「ふぁ～」(4日とも同内容)

上演場所 | 静岡県掛川市萩間の集落一帯(旧原泉第2製茶工場近くの茶畑付近)

<京都>

『風景によせて 2021』

上演日 | 2021年2月27日(土)・28日(日)

上演時間(各15分) |

14:30～(中庭パフォーマンス)

15:30～(中庭パフォーマンス)

16:30～(屋外パフォーマンス)(両日とも同じ)

※手のひら人形劇のワークショップ「ハンドパペット・アワー」も同時開催

上演場所 | 旧質美小学校(質美笑楽講)(京都府船井郡京丹波町質美上野43)

中庭、および小学校の外に広がる風景

3. 『風景によせて 2020-2021』

▼場所との出会い

今回のプロジェクトでは、山間部で田畑と建物があることに加え、人の手が入っている（人の営みを感じる）場所を上演場所として選定している。京都での会場探しには約5ヶ月間を費やし、60ヶ所以上のリサーチを行った上で決定している。

▼静岡・京都の創作スケジュール

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
SHIZUOKA	原泉アートプロジェクト ディレクターとのオンラインセッション（隔週ペース）											
	緊急事態宣言発出のため、滞在時期を見送り	中旬										
	緊急事態宣言解除		下旬									
	稽古：11月まで月1回、3～10日間ずつ 合計38日間の現地滞在制作											
	「想像する展覧会」 創作プロセスを10月まで毎月郵送											
	上演場所を決定						下旬					
	リハーサル							中旬				
KYOTO	「原泉アートデイズ！2020」会期 (上演①、②)							①	②			
	上演場所探し、視察											
	コロナ禍の状況を受け、 予定されていた上演日を延期											
	会場を質美笑楽講とその周辺に決定、 稽古開始											
	本番までに8日間の会場見学、 現地稽古とリハーサル											～末
	緊急事態宣言発出のため、 上演方法の再調整											初旬
上演											末	

▼上演形態について（「風景演劇」の取組み）



静岡での上演の様子

ソノチは本企画を通して、「**風景演劇**」という独自の様式を作り上げてきた。これは風景画や風景写真にちなんでおり、各地の風景からインスピレーションを受けた一連の作品の総称である。「景色」は主に自然の要素のみで構成されたものを指すことが多いのに対し、「**風景**」は主観的（私的）であることに加え自然の中に街並みや人の営みが入ったものを指す。鑑賞者は人物（パフォーマー）だけでなく自然、そして建物などの人工物も含めた風景を眺めるように鑑賞する。その瞬間その場所にしかない唯一の風景を観客が主体的に切り取るように観るこれらの作品には、慌ただしい毎日の中にも自分らしいと思える時間の流れを回復できるようにとの願いが込められている。コロナ禍で集うことが難しい日々が続くが、この作品は実在する風景を舞台に、そこにあるすべてのもの（目に見えるもの・見えな

●静岡 上演映像： 望遠での記録映像



ズームありダイジェスト版



●京都 上演映像： 風景での上演映像



京都での上演の様子

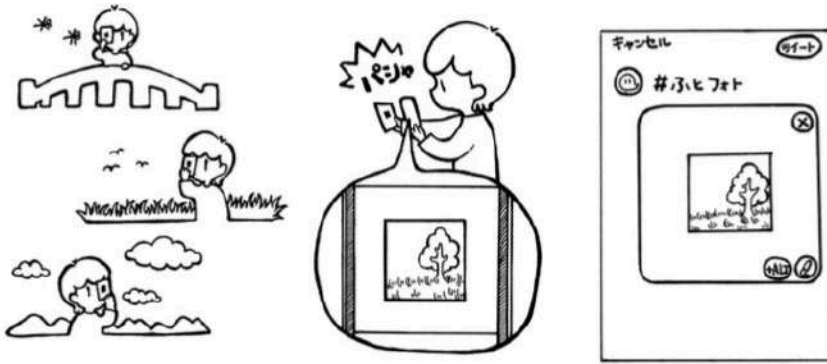
▽ふとフォト

『風景によせて 2020-2021』の上演・展示にあわせて実施した、参加型の企画。名刺サイズ用の紙に、15mmの正方形の窓がついたカード。この窓越しに風景などの写真を撮り、ハッシュタグ [#ふとフォト] をつけて SNS でシェアしてもらう試み。

同じものを見ても、人によってその切り取り方は様々だろう。「風景」という言葉の定義のひとつに、客観ではなく主観である=誰か(何か)のフレームで切り取る、という要素があることから、ふと足を止めて風景をフレームで切り取る写真という、このふとフォトのコンセプトが生まれた。このカード越しにパフォーマンスを鑑賞することもできる。

— みつけて、撮影して、投稿する。「ふとフォト」

<https://landscape-theatre2020-2021.jimdofree.com>



4. 企画の全容

〈静岡〉

原泉・・・静岡県掛川市の最北部にある地区。「原泉」という名称は固有名詞の中に用いられることはあっても、現在地名として公には存在していない（地図に載っていない）。

「原泉アートデイズ！」・・・「静岡県掛川市北部に位置する原泉地区を舞台に、現代アートを通して、地域の魅力を発掘しサステナビリティあふれる社会を目指して進化し続けていくプロジェクト」原泉アートプロジェクトが主催するイベント。2018年から毎年開催しており、2020年で3年目を迎えた。ソノノチは2019年度から2年連続での参加。

参照：<https://haraizumiart.com/cn1/2020-04-28.html> <https://haraizumiart.com/index.html#about>

▽展示作品



パフォーマンスと併設した展示。最後にパフォーマーがいた場所に、赤い衣装を着たかかしが立っている。丘の上の鑑賞場所から見ると、まるでパフォーマーが上演時のまま付んでいるように見える。上演の余韻や痕跡をその場に極力残すような展示にしたかったため、このような方法をとった。また、キャプションがある場所にパフォーマンス会場の風景を描いた絵画があり、展示はその絵ともリンクしている。



▽HARAIZUMI ARTIST IN RESIDENCE

2021 WINTER 新時代における制作の可能性の探求

=====

第1弾 オンラインアーティストトークに、ゲストアーティストとして中谷和代が出演。「原泉アートデイズ! 2020」にて発表した『風景によせて』の原泉における滞在制作の様子、制作秘話、作品の今後の展望などについてプレゼンテーションを行った。



アーティスト：中谷 和代（ソノノチ代表、演出家）

日時：2021年1月6日（水）19:30～

アーカイブ動画→ https://youtu.be/r_q2Hpkkyo

〈京都〉

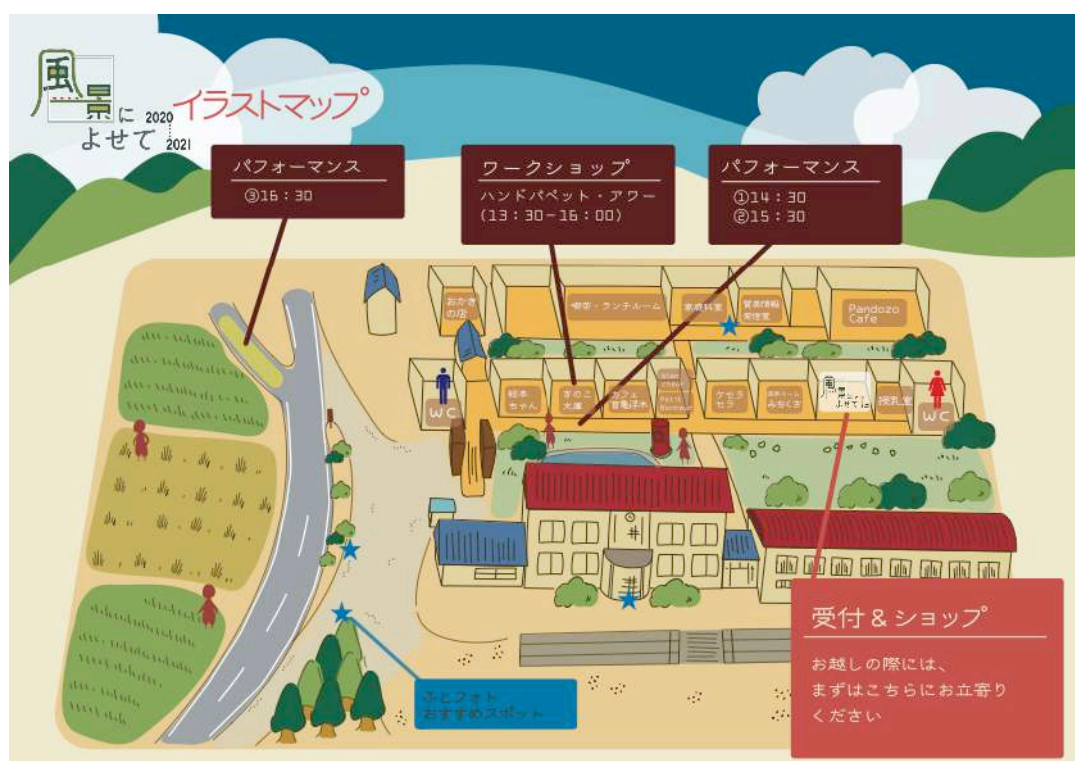
▽会場の情報

質美・・・京丹波町内にある山村地域。周囲を山に囲まれた谷間に位置する長閑で景色の良い集落である。映画撮影によく使われる“質美八幡宮”という平安時代に創建された歴史ある神社や廃校活用の成功事例としても全国的に注目される「旧質美小学校」を利用した“質美笑楽講”などが有名。6月頃には川辺でホタルも見られる。

(参照：質美地域振興会ホームページ https://shitsumi.org/site/?page_id=15)

質美笑楽講・・・昭和 35 年に建設され、2011 年に 52 年の歴史に幕を閉じた旧質美小学校の校舎を利用して作られた施設。2012 年オープン。「京丹波質美振興会が運営し、質美地域の内外の産業、文化の交流と育成を目指す」各種活動が行われている。空教室には飲食店、雑貨店、絵本屋、図書室などが営業しており、「あらゆる方々が楽しめる施設」である。

(参照：http://shitsumi.org/site/?page_id=23)



▽中庭での上演

『風景によせて 2021』では、屋外での上演のほか、小学校の廊下から窓越しに鑑賞できる、中庭でのパフォーマンスを行った。



▽校外の風景での上演



▽手のひら人形劇のワークショップ「ハンドパペット・アワー」

質美笑楽講のきこの文庫にて、2日間開催。カラフルな手袋に様々なパーツを貼り付けてオリジナルのハンドパペットをつくり、風景ジオラマの中で演技をしたり、撮影ができるワークショップ。小学1年生から参加可能。



ワークショップ参加人数

2月27日(土) 10人(体験者数) / 16人(来場者数) 2月28日(日) 18人 / 19人

合計 : 28人 / 35人

▽ショップ

物販部「ソノチノチ」とは・・・上演の内容（ストーリーや登場人物）にちなんだ様々なグッズを手作りで製作・販売することで、物を通して物語や演劇に興味をもってもらいたいという思いからスタートした活動。手作り雑貨の好きな層へ観劇のきっかけづくりにもなっている。公演当日の物販だけでなく、定期的なアートフリーマーケットや雑貨店への出品、幼児～大人までを対象とした「ものづくりワークショップ」（スタンプハンカチづくりや、アクリルパーツを用いたアクセサリづくり等）の開催も行っている。



▽アーカイブ

創作の過程を記録することにしたのは、コロナ禍においてパフォーマンスを上演できるかがプロジェクト開始当初から分からなかったことが背景にある。創作過程の記録がそのまま作品にすらなる可能性があった。本格的に記録を行うためにアーカイブチームを立ち上げ、稽古期間に限らず、プロジェクトを開始した4月からのすべての稽古やミーティングを記録した。記録形式は写真、音声、動画（ドローン・VRなども含む）、テキスト（メモ書き・SNSの記録）と多岐に渡る。その膨大な記録の中から今回、『風景によせて2020』のアーカイブカード集と映像集を制作し、ウェブ上で販売を行っている。

ショップ URL : <https://sonochinochi.stores.jp>



5. 上演記録

▼観覧者数

静岡／京都の合計・・・延べ455名

静岡・・・延べ320名

10月16日（金）リハーサル6名

10月17日（土）32名

（1回目：10名／2回目：22名）※3回目と4回目は荒天のため中止

10月18日（日）79名

（1回目：19名／2回目：7名／3回目：37名／4回目：16名）

11月14日（土）72名

（1回目：14名／2回目：8名／3回目：28名／4回目：22名）

11月15日（日）137名

（1回目：23名／2回目：30名／3回目：53名／4回目：31名）

京都・・・延べ135名

2月27日（土）64名

（1回目：17名／2回目：19名／3回目：28名）

2月28日（日）71名

（1回目：35名／2回目：25名／3回目：11名）



雨天時の上演の様子

▼「風景演劇」鑑賞者の声

先週金曜日に掛川市の原泉地区に出かけた。目的は「原泉アートデイズ」という山里全体を会場に展開されている芸術祭を観るため。廃屋や廃工場、お寺や畑など、その土地ならではのロケーションを利用した作品群は観るべきものが多かったが、中でもひとときわ琴線に触れるものがあった。

それは山里の風景の中で行われる演劇「風景によせて 2020」。(※以降、中略)

山里が一望できる小高い畑の農道にセットされた小さな赤い折りたたみ椅子に座る。心が穏やかになる景色が目の前に広がる。点在する家々。畑で作業をする人。芸術祭に来たとおぼしき人。すれ違う車。風の音。それらがすべて劇場なのだ。そして、15分のその舞台を見てとても満足を得ると同時に深く感心した。これはやはりただの野外劇ではなかった。そのコンセプトからしてこれまでの演劇の常識から外れていて、それが見事にパフォーマンスとして効果を表していることに深く感心したのだ。

絵画に風景画というジャンルがある。16~17世紀ごろに風景画が生まれ、その後に人々は「風景」を発見したと言われている。この話がとても好きだ。目の前にずっとあったはずの景色が改めて風景として立ち現れるのだ。「私」が認識することによって新たな世界が現れるということだろう。

そしてこの作品もまたこのような効果を生み出していた。刻一刻と変わる風景画のように目の前に新しい世界が広がっていくような感覚を持った。俳優の顔など分かるはずもないがそこには確実に生の営みがある。風景画に描かれている人たちと同じように。

とても新鮮な体験。まだまだこの体験を語る言葉を持ってないが、ひとつの大きな可能性を感じていることは確か。これからどうなるのだろう。とても楽しみ。

このような演劇が生まれるのは、もちろん劇団の歩みの賜物だが、コロナ禍が影響しているも確かだろう。多くの制限を強いられているが、それによって新しいアイデアが生まれてくることはある。その素晴らしい事例を目の当たりにして自らを振り返る。頭、手、足を不足なく動かしながら思考を巡らしたい。前に進もう。(Facebook 投稿より)

- ・風景を自分が見ているとき、風景もこちらを見ている感じがした。
- ・(パフォーマンスで流している)音楽が途切れたときに、この場所にある様々な音がより大きく聞こえることに気づく。
- ・京都市内で喧騒と刺激にまみれてる今。改めて何かをぼーっと見つめること、聞くことの素晴らしさを教えられました。
- ・心がポカポカになりました。
- ・旅の絵本みたいなワクワクが現実の風景で再現されて、走ってくバイクの音や日差しの熱、畑仕事にでてきた民家の人、すべてが良い仕事をしていて、私はなんと演劇って広いのだろうと思った!
- ・遠くで赤い人が少しずつ進んで行く。同じ動きでお互いの方へ。夢の中に居るような不思議な感覚。人間なのに人間ではないもの。すぐく見入ってしまいました。いつも見る普通の景色(すぐくすきなのですが)にも、こんな自由な使い方ができるし可能性があるのだなと目から鱗が落ちる思いでした。
- ・中庭と外の風景の質感が全く違うので、その違いという意味でも、エンターテインメント性があった。
- ・この季節ならではの、色の少ない風景のなかで、鮮やかな赤が動いていくのが、春の訪れのように感じました。

▼取材、掲載等

『風景によせて 2020-2021』は、新聞やケーブルテレビなど様々な媒体に掲載された。

※静岡での上演は「原泉アートデイズ！」の一環としての上演のため、一参加アーティストとして掲載。

原泉（掛川）で芸術の秋楽しんで 15日から「アートデイズ」

2020年10月11日 05時00分 (10月11日 05時02分更新)



パンフレットを手に「原泉アートデイズ」をPRする羽鳥祐子さん（中）や、油絵作家の北見美佳さん（左）、演出家の中谷和代さん＝県庁で

国内外から招かれたアーティストが、滞在しながら作品を制作する「アーティスト・イン・レジデンス」の取り組みが各地で広がる中、掛川市北部の原泉地区で、十二組のアーティストが制作した作品を楽しめる「原泉アートデイズ」が、十五日から始まる。十一月十五日まで。（高橋貴仁）

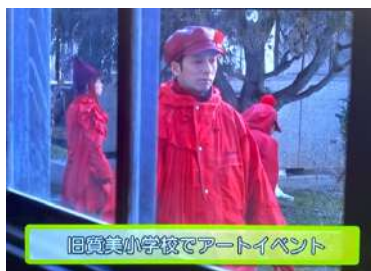
中山間地の原泉地区で、現代アートを通じて地域の魅力を発掘する活動をしている市民団体「原泉アートプロジェクト」が主催し、今回で三回目。

十二組のアーティストは、五月ごろから空き家や空き寺に滞在し、「不完全性」をテーマに創作している。ジャンルは絵画が中心で、沼津市の油絵作家、北見美佳さんは三回目の出展。京都府を拠点に活動する劇団「ソノノチ」は、集落の風景全体を舞台にパフォーマンスを披露する。演出家の中谷和代さんは「パフォーマンスを通じてゆっくりとした時間の流れを体感し、自分の中に流れる時間を感じてほしい」と話す。

南北約八キロの範囲で、各アーティストの展示会場が点在。プロジェクトの羽鳥祐子代表は「お勧めはレンタサイクルで移動しながらの鑑賞。今年はコロナ禍で芸術鑑賞も思うようにできない状態。地域の人も現代アートに興味がある人も、誰もが純粹に芸術を楽しんでほしい」と呼び掛けている。

期間中は午前十時～午後四時開場。当日は旧JA原泉支所（孕石）か、旧田中屋（黒俣）で受け付けが必要。問い合わせはメール=haraizumiart@gmail.com=で。

（中日新聞、2020年10月11日）



（京丹波町ケーブルテレビ「京丹波ウイークリー」にて放送）

6. クレジット

構成・演出 | 中谷和代

パフォーマンス | 芦谷康介、紙本明子、藤原美保、
日向花愛（静岡公演）、日置あつし（京都公演）

楽曲製作 | 瀬乃一郎

演出助手・衣装 | たかつかな

宣伝美術・デザイン | ほっかいゆりみこ

絵画制作 | 森岡りえ子

テクニカル・アーカイブ撮影 | 脇田友

ジオラマ製作・イラスト | やまもとかれん

制作 | 渡邊裕史、吉岡ちひろ

制作補佐 | 柴田惇朗

アーカイブ担当・編集 | neco、駒優梨香

主催・企画・製作 : ソノノチ

共催 : 一般社団法人フリンジシアターアソシエーション

協力 :

質美笑楽講管理運営委員会、絵本ちゃん、423 アートプロジェクト、bridge、
劇団衛星、企画団体〈世界平和〉、サファリ・P、スピカ、劇団なかゆび、
何色何番、nidone.works、廃墟文藝部、プロダクション航路延長、
劇団三毛猫座、ユニット美人、原泉アートプロジェクト
柴田惇朗、ひなたみかん、森岡規行、原泉アートデイズ！関係者の皆さん

京都芸術センター制作支援事業

made in KAIKA

芸術文化振興基金助成事業

7. ソノチとは



2013年より活動を開始。京都を拠点とする、演劇を表現の主軸としたパフォーマンスグループ。空間が内包する膨大な情報を、観客の中に流れる時間や記憶と結びつける独自の演出手法を用い、屋内外を問わず作品を発表している。近年は、空間そのものを作品として捉えるインスタレーションの手法を用い、劇場だけでなく、ギャラリーやカフェ等での上演を行ったり、絵画や音楽など、他ジャンルのアーティストとのコラボレーションも行っている。主なメンバーは、中谷和代（演出家・劇作家）、藤原美保（俳優）、渡邊裕史（制作）。



ソノチ 代表 中谷和代

1985年生まれ。演出家、劇作家、俳優。

ソノチの本公演のほか、ミュージカル、市民劇、音楽コンサートなどの演出も手がける。劇作の他にはワークショップデザイナー、イベントディレクターとして活動。2012年頃から演劇教育に興味をもち、演劇ワークショップの効果測定プロジェクトへ参画。ほかにも文化庁、文科省の学校派遣事業や、高校・大学の講師業などを通して、人材育成に取り組む。2014年～2020年 NPO 法人京都舞台芸術協会理事。現在、日本演出家協会会員／日本劇作家協会会員。